

吉田向井遺跡

—— 塩尻市市道吉田中央線道路改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 ——

1989

塩尻市教育委員会

よし だ ひか い
吉田向井遺跡

—— 塩尻市市道吉田中央線道路改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 ——

1989

塩尻市教育委員会

序

吉田向井遺跡は塩尻市大字広丘吉田下向井地籍にあり、田川右岸の微高地を中心として広がっています。ここは昭和57年度に県営田川地区圃場整備事業が、また昭和60・61年度には中央道長野線建設事業がそれぞれかかったため発掘調査が行われ、平安時代を中心として縄文時代から近世に至るまで非常に長い期間、生活が営まれていたことが明らかにされました。この度、中央道長野線の側道拡幅工事に関連して市道吉田中央線改良工事がこの地域に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から緊急発掘調査が塩尻市教育委員会に委託されたものであります。

発掘調査は市文化財調査委員長、中島章二氏を団長として調査団を編成し、8月下旬より9月上旬にかけて行われました。調査の結果、数多くの遺構・遺物が発見され、今後の研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供することになりました。

本調査を実施するにあたり、関係役員の方々ならびに地元の皆さんには大変お世話になり厚く御礼申し上げます。また調査と整理に携わられた調査員の先生方をはじめとして多くの方々の御努力に対し、重ねて謝意を表するものであります。

平成元年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小松優一

例　　言

1. 本書は、市道吉田中央線道路改良工事に伴う吉田向井遺跡の発掘調査報告書である。なお、本事業は同地区の県道改良工事に関連する工事であり、後者についても同時期に発掘調査が行なわれた。調査報告書については、「1989吉田向井・千本原 塩尻市教育委員会」が本書と同時刊行される。
2. 発掘調査は、吉田向井遺跡発掘調査団（団長 中島章二氏）に委託し、現場での調査は昭和63年8月22日から9月3日まで行なった。
3. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和63年9月から平成元年2月にかけて行なった。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース、図版：鳥羽。

遺物…実例、トレース、図版：小林。

写真…鳥羽。

4. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章遺構	鳥羽嘉彦
第Ⅳ章遺物、第Ⅴ章	小林康男
5. 本書の編集は鳥羽が行なった。
6. 中・近世の遺物については原 明芳、野村一寿各氏の御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。
7. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第 I 章 調査状況	1
第 1 節 発掘調査に至る経過.....	1
第 2 節 調査体制.....	2
第 3 節 調査日誌.....	2
第 4 節 遺跡の状況と面積.....	3
第 II 章 遺跡周辺の環境	4
第 III 章 遺跡の概要	6
第 1 節 過去の調査経過.....	6
第 2 節 調査概要.....	7
第 3 節 発掘区の設定.....	8
第 4 節 土層.....	8
第 IV 章 遺構・遺物	10
1) 住居址.....	10
2) 竪穴状遺構.....	12
3) 集石.....	13
第 V 章 まとめ	15

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

塩尻市内の道路網整備の一環として昭和63年度から始まった県単高速道関連道路改良工事（中央道長野線西側道の拡幅工事）に伴い、これに接続する道路として、「市道吉田中央線道路改良工事」が具体化した。道路予定箇所は昭和57年度に発掘調査が実施され、平安時代の大集落が発見された吉田向井遺跡の遺跡範囲内に想定される箇所であったが、発掘原因となる圃場整備地区内からはずれた宅地であったため、未調査区域となっていた。そこで事業主体である塩尻市と長野県教育委員会文化課の立合いにより保護協議を行い、工事施工前に緊急発掘調査を実施して記録保存をはかることとした。

昭和63年7月22日付、「道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について」により塩尻市教育委員会は、塩尻市から吉田向井遺跡発掘調査の委託を受けた。これにもとづき、7月28日付で塩尻市と委託契約を交わし、市教委はさらに同日付で塩尻市文化財調査委員長中島章二氏を団長とする吉田向井遺跡発掘調査団に再委託した。現場における発掘調査は、8月2日から9月3日にかけて行なわれた。

発掘調査計画書（一部のみ記載）

- 1 発掘調査地 塩尻市大字広丘吉田
- 2 遺跡名 吉田向井遺跡 遺跡番号23-40
- 3 遺跡の状況 地目（宅地）
- 4 発掘調査の目的及び概要 開発事業市道吉田中央線道路改良工事に先立ち150m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。
調査報告書は昭和64年3月20日までに刊行するものとする。
- 5 調査の作業日数 発掘作業7日 整理作業7日 合計14日
- 6 調査に要する費用 1,000,000円
- 7 調査報告書製作部数 300部
- 8 発掘調査の主体者及び委託先 塩尻市教育委員会

第2節 調査体制

団長 中島 章二（塩尻市文化財調査委員長）
担当者 鳥羽 嘉彦（長野県考古學会員、市教委）
調査員 小林 康男（日本考古學会員、市教委）
市川二三夫（長野県考古學会員）
参加者 小沢甲子郎、中野やすみ、小松静子、桜井洋子、高橋阿や子、松下おもと、高橋タケ子、太田 和、足立幸子、一ノ瀬 文。
事務局 塩尻市教育委員会教育長 小松 優一
市教委総合文化センター所長 清水 良次
〃 文化教養担当課長 横山 哲宣
〃 文化教養担当副主幹 三澤 深
〃 平出遺跡考古博物館館長 小林 康男
〃 平出遺跡考古博物館学芸員 鳥羽 嘉彦

第3節 調査日誌

昭和63年8月2日(火) 晴 重機による表土除去作業。上層は以前、取り壊した住宅の廃材が混在しており、その影響を免れた面まで約60cm掘り下げる。廃材を埋設焼却した大穴が調査区に3ヶ所開く。

8月22日(月) 晴 本日より県道部分から作業員が分かれて発掘作業開始。最初に調査区の壁整形と周りの土手の草刈りを行なったのち、ジョレンによる削平作業を始める。須恵器片が僅かに出土。

8月23日(火) 晴 昨日に引き続き砂利混りの黒褐色土を削平。土師器、須恵器片僅かに出土。

8月24日(水) 晴 削平作業継続。黒褐色土の間で遺物が出土。

8月25日(木) 晴 表土を剥ぎ終わり、褐色面で遺構検出作業に入る。遺物の出土量多くなる。

8月26日(金) 晴 黒褐色土の落ち込みを2ヶ所確認。中央のものは梢円形プランで縦、遺物を伴う。また西側のものはプランが不明瞭であるが遺跡の出土量が多く、縄文土器、打製石斧、土師器、須恵器、縄釉陶器が出土。

8月27日(土) 晴 昨日確認された落ち込みをベルトを残して掘り下げ。西側のものは一部貼床の部分が認められるところから、縄文と平安の住居址の重複が伺える。調査区東側で方形を呈する集石が検出され、写真撮影と平面図測図を行う。

8月28日(日) 定休日。

8月29日(月) 晴 中央の土壤、セクション図化、完掘。西側の住居址はプランがはっきりし

ないが、堅緻な床面が広がるため第1号住居址とする。集石の礎をはずしたところ、掘り込みはほとんどなく、焼土と骨片が出土。

8月30日(火) 晴 第1号住居址床面精査。

8月31日(水) 晴 第1号住居址、土壌の遺物取上、平面図測図。

9月1日(木) 晴 第1号住居址の貼床を剥ぐ。

9月2日(金) 貼床の下から灰釉陶器片が出土し、縄文の床面の可能性が消える。調査区の全体図作成。

9月3日(土) 晴 第1号住居址、貼床を剥ぎ精査。調査区東端にやや色相の異なる箇所があり、掘り下げてみたところ床面を確認。第2号住居址とする。完掘し平面図測図、写真撮影。本日をもって現場における作業を終了する。

整理作業は9月～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また報告書の原稿執筆を行う。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
吉田向井	塩尻市大字広丘吉田 2793-1	宅地	包蔵地	24,000m ²	200m ²	150m ²	170m ²	1,000,000円

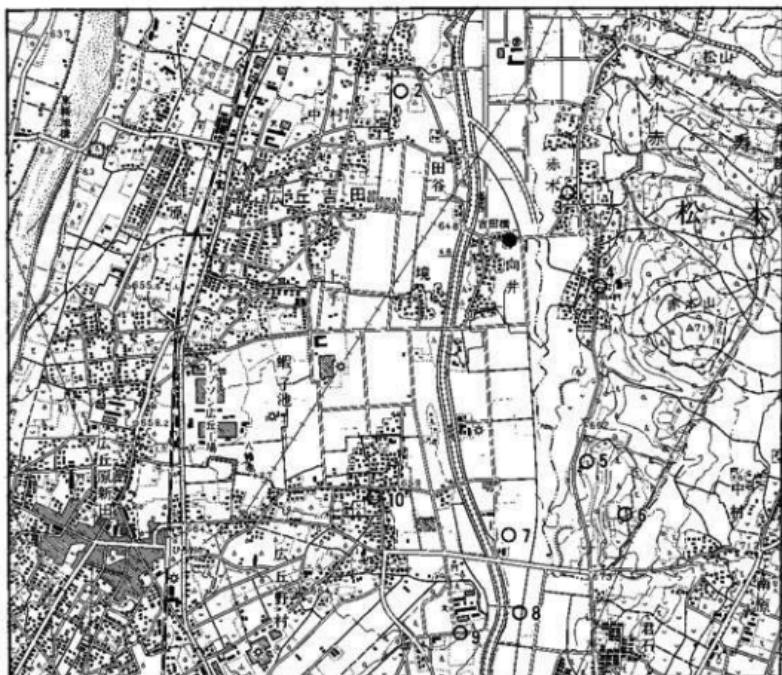
第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	8	9	10～2	主な遺構	主な遺物
吉田向井	22.3 発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆		平安時代住居址 平安時代竪穴状遺構 集石	2 1 1 縄文時代 土器、石器 平安時代 土師器、須恵器。 灰釉陶器、縄釉陶器

(事務局)

第II章 遺跡周辺の環境

吉田向井遺跡は長野県塩尻市大字広丘吉田下向井地蔵にあり、JR 広丘駅から北東へ約 2 km 隔てた地点にある。この付近一帯は地図からも読み取れるよう松本市側へ飛びだした形となつておらず、東隣りに走る中央道長野線のすぐ東側が両市の市境となっている。東方500 m に赤木山の独立小丘が南北に横たわっており、背後に高ボッチ山(1,665 m)、鉢伏山(1,929 m)といった筑摩山地のなだらかな山稜が控えている。また西方約 8 km には北アルプスの峻嶺が屏風絵のごと



1:25,000

- 1. 吉田向井 2. 吉田川西 3. 小赤 4. 赤木 5. 前田本下
- 6. 白神場 7. 花見 8. 高田 9. 丘中学校 10. 野村

第1図 吉田向井遺跡位置図

く続く絶景を呈し景観に恵まれている。

この付近は田川によって搬入された砂礫層からなる沖積層を基盤としており、隨所に小規模な自然堤防状の微高地を発達させている。田川は塩尻峠に源を發し、塩尻東地区を経て、大門市街地の東側に沿って北流する河川である。後背地に善知鳥岬、大芝山などに達する石灰岩体を有するため、硬度の低い松本平の諸河川の中にあっては比較的高い値を示してはいるが、奈良井川等に比べて水量が少なく、浸食作用の小さな安定した河川である。このため河川沿いには長期にわたって集落が営まれており、数多くの遺跡が発見されている。

吉田向井遺跡は田川右岸の、現在、墓地に利用されている付近を中心とした自然堤防上に立地しており、海拔は645m前後を測る。ここを中心に放射状に傾斜地形となっており、現在の田川河床は西方約230m隔て、比高差5mで位置する。途中、田川から約50mの位置に比高差2mの明瞭な段丘差を確認することができる。また東方約40mにも、小田川の流れ方がちょうど遺跡を挟む形で北流しており、ここが市境となっている。

遺跡の範囲は、過去に実施された調査成果により、およそ東西150m、南北220mとなるが、生活が営まれていた各時代の集落範囲にいくらかのずれがあったようである。

さて、周辺の遺跡に目を向けてみると、田川を挟んで西側には吉田川西遺跡が対峙している。昭和60年に発掘調査が行われ、平安時代を中心とする大集落址が確認されている。そのすぐ北側には大量の古銭を出土し話題をもいた中世の若宮遺跡があり、西方の奈良井川沿いには同じく中世の居館址である長者屋敷遺跡がある。

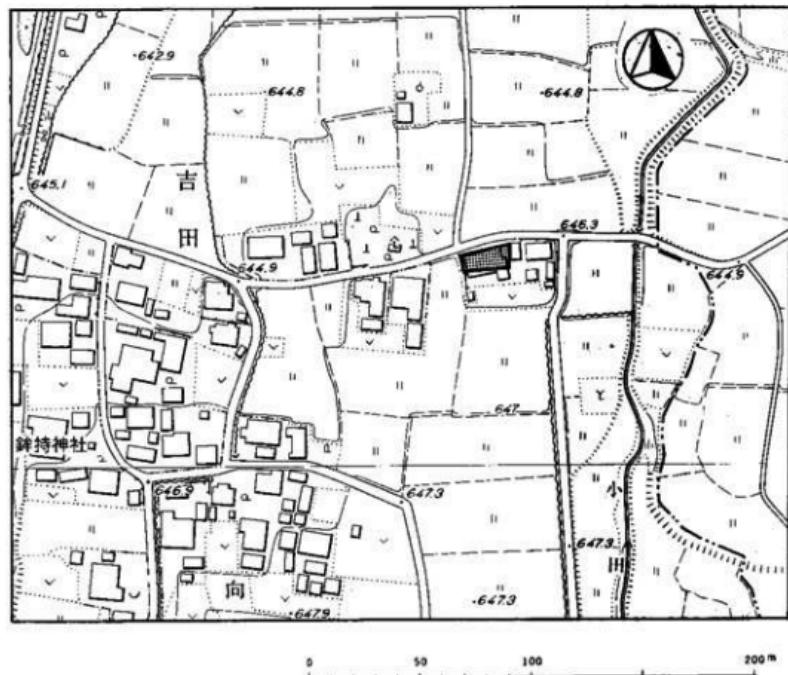
小田川を挟んで東方には赤木山の独立小丘が横たわっており、ここに白神場、前田木下、赤木、石行、小赤など合計16ヶ所の遺跡が展開している。これらは現在、隣りの松本市地籍となっているが、当時はもちろん吉田向井遺跡と距離的にも重要な関わりをもっていたことが推察される。

田川を逆上ると広丘野村地籍では、同じような自然堤防上に立地して、縄文中期と弥生後期の土器を出土した花見遺跡、縄文・平安時代の野村遺跡、平安時代の住居址3軒が発見された高田遺跡があり、また丘中学校以南に形成される段丘上には南北3kmにわたって遺跡の稠密地帯となっており、いわゆる高出遺跡群を構成している。

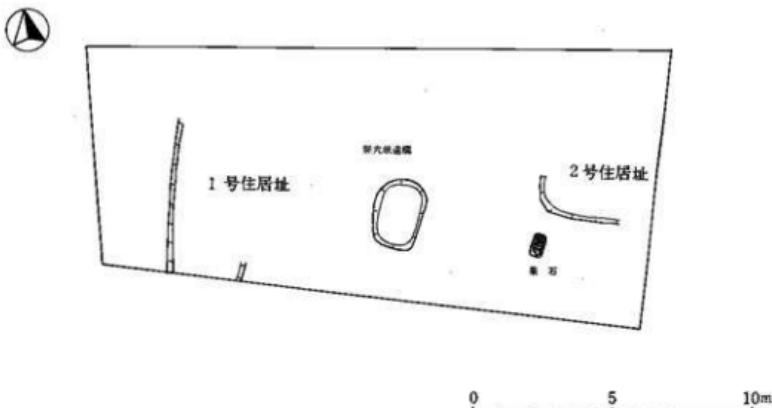
第III章 遺跡の概要

第1節 過去の調査経過

吉田向井遺跡は田川の対岸に立地する吉田川西遺跡とともに平安時代の遺跡として古くからよく知られていたが、付近一帯が田川や小田川の水利を生かした水田に利用されていたため、近年まで遺跡の詳細については不明な点が多くあった。ところが最近、大型開発事業が相次いでこの地にかかかったため、緊急発掘調査が行われ、遺跡の性格がある程度まで明らかになってきた。



第2図 調査地区図



第3図 遺構全体図

最初は昭和57年に実施された県営田川地区圃場整備事業に先行して市教育委員会により発掘調査が行なわれた。調査地区は墓地の北側に展開する4,200 m²の水田(今回の調査地からは北西方向にあたる)で、約2ヶ月にわたる発掘調査の結果、平安時代の住居址85軒、建物址3棟、堅穴3基が検出されたほか、縄文時代草創期、中期、弥生時代の遺物がそれぞれ出土した。昭和60年と61年には中央道長野線建設事業に関連して、勤長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が5,660 m²にわたって行なわれた。調査地区は今回の調査地の東隣りで小田川までの間である。調査の結果、縄文時代中期の住居址2軒、遺物集中区1ヶ所、古墳時代の土壙1基、平安時代の住居址15軒、溝址2基、平安時代～中・近世の土壙200、中・近世の建物址2棟、堅穴状遺構1基が検出された。

また今回の調査とほぼ同時に実施された中央道側道建設に関連する発掘調査は上記の2ヶ所にちょうど挟まれる位置にあたり、調査の結果、平安時代の住居址1軒、中世の住居址3軒、建物址1棟、土壙12基、堅穴状遺構1基が検出された。

このような結果は、時代により多少の居住域のずれがあるにしても、この地に縄文から近世・現代に至るまで、脈々と生活が営まれていたことを物語るものである。

第2節 調査概要

吉田向井遺跡は前項で述べたように平安時代の集落を中心に縄文時代草創期から近世に至るまで断続的に生活が営まれており、今回、発掘対象となった地区も小範囲ながら周囲の調査結果か

ら勘案してかなりの成果が期待されていた。しかし以前ここにあった住宅を取り壊す際、残骸を廃棄、焼却するための大穴が数ヶ所穿たれており、このため遺構面が保存されている面積は実際に発掘がなされた150 m²すべてではない。全体図にみられる北側の空白部分はそのほとんどがこの大穴によって破壊されていた箇所であり、元々はかなりの遺構が存在していたものと推察される。

さて発掘調査の結果は平安時代のものと思われる住居址2軒、竪穴状遺構1基、中・近世の集石1基と、ほかに遺構は検出されなかつたが多量の縄文時代中期の遺物が出土している。

調査範囲が小規模なため、これらの資料のみでは遺跡全体の中での性格づけは難しいが、多様にわたる出土遺物はこれまでに実施された調査成果を反映させるものといえよう。

第3節 発掘区の設定

発掘調査区は吉田向井遺跡のはば中央にあたると思われる箇所で、現在の下向井集落の東のはずれに位置する。ここは以前、宅地として利用されていたが、中央道建設に伴う住居移転により、空地となっていた。移転の際、取り壊しの残骸を埋設しており、加えて表層部はコンクリートブロックや砂利によって覆われていたため、遺物の表面採取はできず、また試掘坑も無意味と思われたため、バックホーによる全面の表土剥ぎを行なった。

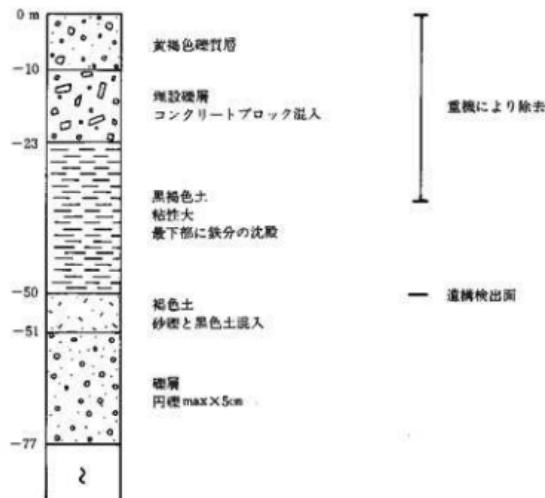
遺構面まで掘り下げたところ、北半域に3ヶ所、残骸の廃棄・焼却した大穴が穿たれており、実際に保存されている面積はかなり小規模になることがわかった。このためグリッドは設定せず、調査区全域で使える方針に変えた。

発掘区の総面積は150 m²である。

第4節 土 層

調査地区内は前項でも触れたように以前に取り壊された残骸や砂利によって表層を覆われており、加えてそれらを埋設するために穿れた数ヶ所の大穴によってかなり土層にも攪乱が生じている。こうした状況の中で調査区の基本層序を求めるることは難しいが、比較的保存状態のよい北側の壁で測定された柱状図（第4図）について検討してみる。

壁高77 cm の中が基本的には5層に細分される。第I層および第II層は埋設された砂利、残骸から構成され、発掘調査に先立って重機により除去された。第III層はやや粘質の黒褐色土で、部分的に酸化鉄の結晶様がみられるところから、田川の氾濫原堆積物と思われる。本層の下部約10 cm が遺物包含層となっている。第IV層は褐色土で、黒色土と砂礫を混入しているところから二次堆積ロームの可能性が強い。本層の最上面が遺構検出面にあたり、第2号住居址や竪穴状遺構など掘り込みの深いものは本層を貫き下部の礫層が床面に露呈している。第V層は中礫を主体とする礫層となり、柱状図以下のかなりの深さまで続いている。本層は河川堆積物であり、遺構の存在



第4図 層序断面図

については可能性が薄い。

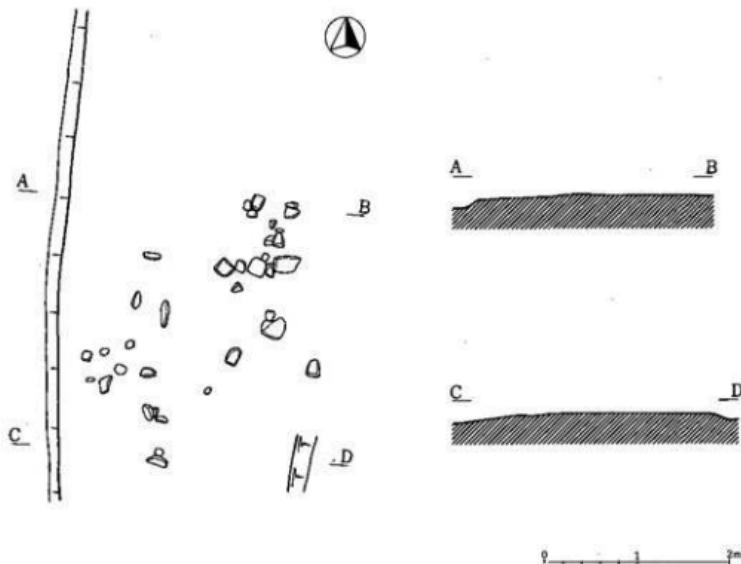
第IV章 遺構・遺物

1) 住居址

第1号住居址

遺構 本址は調査区の西端に位置する。遺構検出段階において落ち込みのプランは検出されず、代わりにおびただしい礫群と遺物の出土をみた。これらの遺物を精査中に堅硬な床面がかなり広い範囲に露呈し、第1号住居址とした。出土遺物の傾向は中央を境に東西で異なり、東側が縄文時代の土器、石器を中心に出土するのに対し、西側では平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器などが出土したため、当初は2軒の住居址の重複かとも考えられたが、最終的に床面が同一面であることが確認されたことにより、縄文時代の遺物の混入と結論づけられた。

住居址は西側がほぼ南北方向の周溝もしくは溝によって斬られ、深いところで10cmの落差をもって落ちている。また南東隅にも比高差6cmを測る落差がみられるが、こちらは床面の起伏の範囲にとどまる。東側は大穴によってすでに消滅しており、また南側も調査区外へ潜っているため住居址の形態、規模等を明らかにすることはできなかった。



第5図 第1号住居址

床面は中央南寄りが僅かに高いが、概して平坦で、よく踏み固められた堅緻な面である。出土したおびただしい礫群の中で、中央東寄りに炉石によく似た数個の礫が認められたが、焼土等は検出されなかった。

遺物 遺構の残存状態が悪かったことも原因して、出土遺物は僅少であった。しかも出土した遺物も小片が大半で、その詳細を知ることに困難をきたしている。住居址覆土からは図示した1~3の3個体のはかには土師器と中世陶磁器小片がわずか得られているのみである。1、2は灰釉陶器辺の口縁部破片、3は16世紀前半に属する美濃大窯の天目茶碗で、鋸輪が美しい。このほかに16世紀の瀬戸美濃系の丸碗の出土がある。

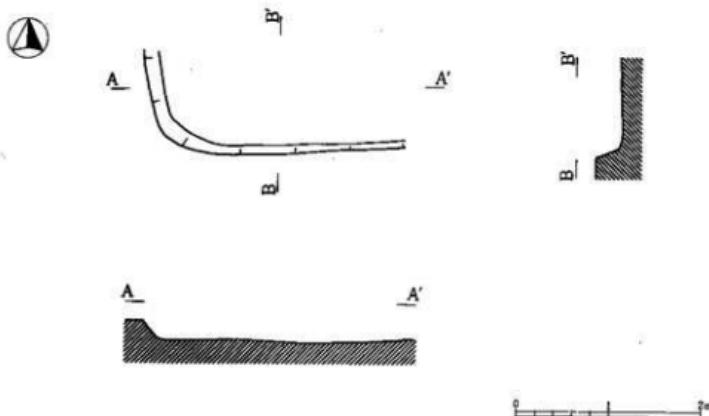
なお、以上の土器類のはかに、6、7に示した打製石斧が覆土中から出土している。ともに盤形を呈し、刃部に磨滅痕が著しい。

本址出土の遺物の様相は複雑であり、時期を決するに困難であるが、灰釉陶器の出土が比較的多いことから平安時代に比定しておきたい。

第2号住居址

遺構 本址は調査区東端にあり、すぐ西側に集石遺構が存在する。北側は大穴によって斬られしており、また東側は調査区外となるため、住居址の一部を検出したのみであった。住居址の覆土の色相が遺構面とあまり違ひがなかったため落ち込みに気がつかず、調査最終日になって漸く発見された。

住居址の一部しか検出できなかつたためプランは容易には把握できないが、残存壁の在り方よ



第6図 第2号住居址

り推して隅丸方形の平面形態を呈すると推察され、主軸方向はほぼ南北または東西を指す。壁は比較的浅いが、ほぼ垂直に掘られ凹凸の少ない堅緻な面を有している。壁高は南壁で17cm、西壁で21cmを測る。床はよく踏み固められ堅緻である。床面上に柱穴、周溝などの施設は検出されなかった。

遺物 本址出土の遺物は、4に図示した灰釉陶器皿がわずかに出土したのみである。口縁部の小片で、詳細は知り得ない。

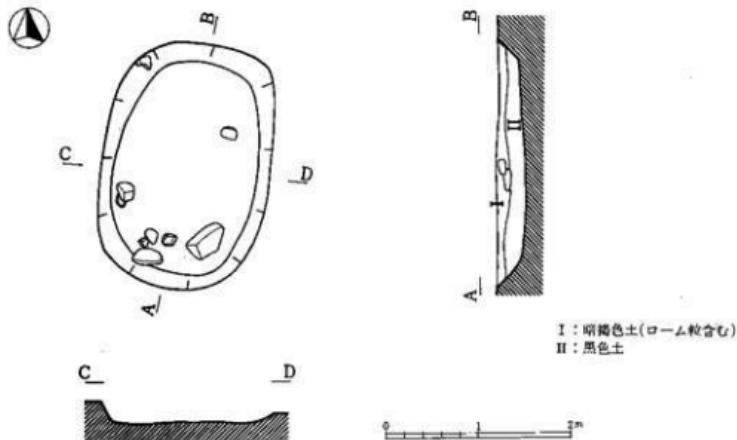
2) 積穴状遺構

調査区の中央南壁沿いに検出された。ローム面における造構検出段階において構円形の落ち込みが認められ、南北のベルトを残して掘り下げたところ、数個の大礫と遺物が覆土中より出土した。

遺構は構円形の平面形態を有し、N—25°—Eの主軸方向を指す。確認面での規模は南北265cm、東西180cmを測る。断面は舟底形を呈し、最も深いところで30cmを測る。

壁および底は堅緻で、凹凸の少ない良好な面をもつ。底面は中央がやや窪んだ丸底を呈し、南北両側へ徐々に緩傾斜で上がっていく。

覆土中に混在する礫と遺物は底面から僅かに浮いており、第Ⅰ層の暗褐色土の境界付近に介在する。第Ⅰ層と第Ⅱ層が逆転していること、また遺物が覆土中に浮いていることから、一度掘り上げたこの遺構を何らかの目的で埋め戻したことが伺える。



第7図 積穴状遺構

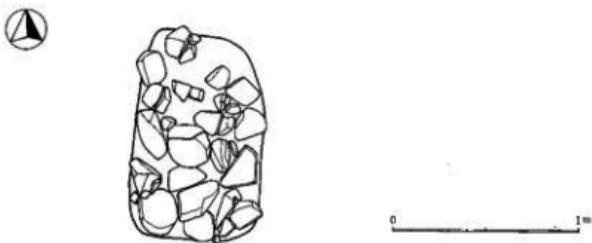
本址出土の遺物は、5に図示した平安時代末の輸入陶磁器と土師器坏片がある。5は、11世紀末～12世紀前半に比定される北宋の白磁II類碗である。土師器坏は、底部の小片があり、底面に回転糸切り痕を残し、高台を付したものである。

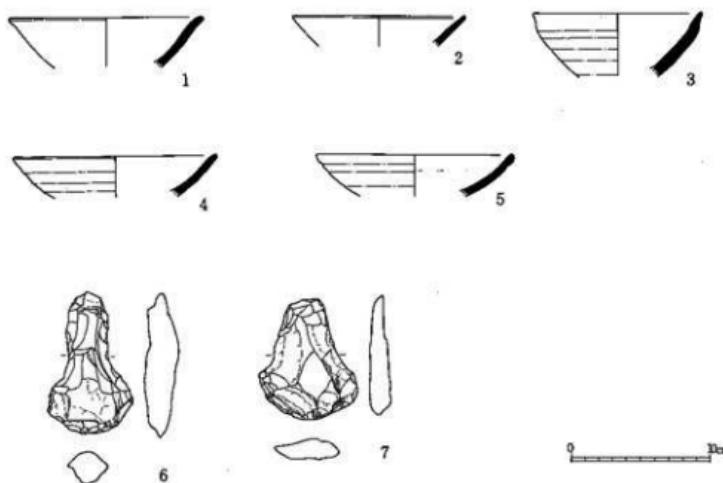
本址は、輸入陶磁器の年代から平安時代末に位置づけられよう。

3) 集石

径5～25cmの砾を長方形プランに敷き詰めた形で検出された。砾自身は焼けていなかったが、周囲の地面が僅かに焼けていたため当初、墓壇の可能性が考えられた。

掘り込みは110cm×70cmの長方形を呈し、底はタタキによりかなり堅緻になっていた。底および周囲が火を受けており、ここで火葬が行なわれたことを示している。





土器観察表

番号	発掘区	種別	器種	法徑 (mm)			色調	焼成	成型調整方法		備考
				口径	底径	高さ			外 国	内 土	
1	1H	灰陶	皿	138	-	-	暗白色	暗白色	良	ロクロナデ	
2	1H	灰陶	皿	122	-	-	淡白色	淡白色	良	ロクロナデ	
3	1H	夹炭大腹	天目	119	-	-	茶	茶	良	ロクロナデ	
4	2H	灰陶		144	-	-	深白色	淡白色	良	ロクロナデ	
5	特殊	白磁		160	-	-	淡白色	淡白色	良	ロクロナデ	

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
6	1H	打製石斧	ホルンフェルス	102	70	12	105	
7	1H	打製石斧	ホルンフェルス	86	70	15	95	

第V章 まとめ

吉田向井遺跡は、今回の調査も含め計4回の発掘調査が実施され、その性格も次第に明らかになってきている。

それによると、吉田向井遺跡は、田川、小田川の両河川にはさまれた南北に長い地帯に立地し、縄文草創期・中期・弥生時代中期・古墳時代・平安時代・中・近世と断続的ではあるが長期にわたって生活の場とされてきた。しかし、東西160m、南北250mにも及ぶ広範囲にわたる遺跡の中で、縄文中期は小田川に沿った南端を中心とし、また平安時代は北半地域を中心としつつもほぼ全城に展開し、中・近は小田川に沿った東側に集中するというように、各時代ごとに微妙に占地場所が異っている。

今回の市道拡幅部分は、遺跡全体からみると南端地域にあたっている。各時代の位置づけとしては、縄文中期集落の北のはずれ、平安時代集落ではその南のはずれ、そして中・近世においては南北に長く占地する遺構群のちょうど中央部にあたっている。

本調査区域は、小範囲のうえ擾乱も入っており、必ずしも充分な成果をあげえたとはいえないかもしれない。しかし、上記したように、それぞれの時代にそれぞれ何らかの役割を担った場所であった。吉田向井遺跡の、各時代の性格づけを語るに際し、今回の調査成果はやはり大きな役割を果すものといえよう。



調査区発掘前全景（東側から）



表土除去作業（西側から）



第1号住居址



第1号住居址掘り下げ



第2号住居址



竪穴状遺構

図版 4



集 石



調査区全景（東側から）



発掘作業風景



遺物取上げ風景

吉田向井遺跡

—塩尻市市道吉田中央線道路改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—

平成元年3月8日 印刷
平成元年3月10日 発行

発行 塩尻市教育委員会
印刷 電算印刷株式会社

吉田
向
井通
詩

吉田向井通詩